

$\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ と $\mathrm{Tr}\mathcal{A}$

よの

2023 年 8 月 13 日

概要

ねじれ複体を定義することで, 具体的な三角圏の構成を与えることができる.

目次

1	加法的拡大	1
2	ねじれ複体	4
3	加法的拡大と Tw の関手性	5
4	Tw に対する c-unital 性	6
5	ねじれ複体の直和とテンソル積	8
6	ねじれ複体のシフト	9
7	ねじれ複体における微分の取り換え	10
8	ねじれ複体の写像錐	10
9	$\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ における完全三角	10
10	$\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ への完全三角の埋め込み	11
11	$\mathrm{mod}(\mathcal{A})$ が三角 A_∞ 圏であることについて	11

1 加法的拡大

I を有限集合, \mathcal{A} を恒等射を持たない A_∞ 圏とする. $\{X^i\}_{i \in I}$ を \mathcal{A} の対象の族, $\{V^i\}_{i \in I}$ を次数付き有限次元ベクトル空間の族とする.

定義 1.1 (\mathcal{A} の対象の加法的拡大). $\{X^i\}_{i \in I}$ と $\{V^i\}_{i \in I}$ に対して, 形式的なテンソル積 \otimes と直和 \oplus ^{*1} を用いて

$$X = (I, \{X^i\}, \{V^i\}) := \bigoplus_{i \in I} V^i \otimes X^i$$

を \mathcal{A} の対象の加法的拡大 (additive enlargement of object in \mathcal{A}) という.

定義 1.2 (加法的拡大の射). \mathcal{A} の対象の加法的拡大 $X_0 = \bigoplus_{i \in I_0} V_0^i \otimes X_0^i$, $X_1 = \bigoplus_{j \in I_1} V_1^j \otimes X_1^j$ に対して, X_0 から X_1 への射の集まり $\text{hom}(X_0, X_1)$ を次のように定義する.

$$\begin{aligned} \text{hom}(X_0, X_1) &= \text{hom} \left(\bigoplus_{i \in I_0} V_0^i \otimes X_0^i, \bigoplus_{j \in I_1} V_1^j \otimes X_1^j \right) \\ &:= \left(\bigoplus_{i,j} \text{hom}_{\mathbb{K}}(V_0^i, V_1^j) \otimes \text{hom}_{\mathcal{A}}(X_0^i, X_1^j) \right) \end{aligned}$$

^{*2} $\text{hom}(X_0, X_1)$ の元を加法的拡大の射 (morphism of additive enlargements) という.

加法的拡大の射は行列表示することができる.

記法 1.3 (加法的拡大の射の行列表示). 加法的拡大の射に対して

$$\begin{aligned} a^{ji} &\in \text{hom}_{\mathbb{K}}(V_0^i, V_1^j) \otimes \text{hom}_{\mathcal{A}}(X_0^i, X_1^j) \\ \sum_k \phi^{j,i,k} &\in \text{hom}_{\mathbb{K}}(V_0^i, V_1^j) \\ \sum_k x^{j,i,k} &\in \text{hom}_{\mathcal{A}}(X_0^i, X_1^j) \end{aligned}$$

とすると, 任意の $a \in \text{hom}(X_0, X_1)$ は

$$a = (a^{j,i}) = \begin{pmatrix} a^{1,1} & \cdots & a^{1,I_1} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a^{I_0,1} & \cdots & a^{I_0,I_1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sum_k \phi^{1,1,k} \otimes x^{1,1,k} & \cdots & \sum_k \phi^{1,I_1,k} \otimes x^{1,I_1,k} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \sum_k \phi^{I_0,1,k} \otimes x^{I_0,1,k} & \cdots & \sum_k \phi^{I_0,I_1,k} \otimes x^{I_0,I_1,k} \end{pmatrix}$$

と表される. ^{*3}

加法的拡大の集まりは恒等射を持たない A_∞ 圏を定める.

定義 1.4 (恒等射を持たない A_∞ 圏 $\Sigma \mathcal{A}$). 恒等射を持たない A_∞ 圏 $\Sigma \mathcal{A}$ を次のように定義する.

^{*1} この 2 つは単なる記号であることに注意. 3 章で定義されたテンソル積と直和とは「今は」関係がない.

^{*2} 最後の $\text{hom}_{\mathbb{K}}$ は集合で $\text{hom}_{\mathcal{A}}$ はベクトル空間なので, 最後のテンソル積と直和は通常のものである.

^{*3} $(a^{j,i})$ において \sum の添え字は k で固定して書いているが, 実際は異なることに注意. 簡単のため, $k = 1$ で \sum を省略する場合を考慮することがある.

- $\Sigma\mathcal{A}$ の対象 X は \mathcal{A} の対象の加法的拡大

$$X := \bigoplus_{i \in I} V^i \otimes X^i$$

- 任意の $X_0, X_1 \in \text{Ob}\Sigma\mathcal{A}$ に対して, $\text{hom}_{\Sigma\mathcal{A}}(X_0, X_1)$ は加法的拡大の射の集まり

$$\text{hom}_{\Sigma\mathcal{A}}(X_0, X_1) := \text{hom} \left(\bigoplus_{i,j} \text{hom}_{\mathbb{K}}(V_0^i, V_1^j) \otimes \text{hom}_{\mathcal{A}}(X_0^i, X_1^j) \right)$$

- 任意の $d \geq 1$ と $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{j,i}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して, 合成

$$\mu_{\Sigma\mathcal{A}}^d : \text{hom}_{\Sigma\mathcal{A}}(X_{d-1}, X_d) \otimes \dots \otimes \text{hom}_{\Sigma\mathcal{A}}(X_0, X_1) \rightarrow \text{hom}_{\Sigma\mathcal{A}}(X_0, X_d)[2-d]$$

は次のように定義される.

$$\begin{aligned} \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^d(a_d, \dots, a_1)^{i_d, i_0} &:= \sum_{i_1, \dots, i_{d-1} \geq 0} (-1)^{\triangleleft} \phi_d^{i_d, i_{d-1}} \circ \dots \circ \phi_1^{i_1, i_0} \otimes \mu_{\mathcal{A}}^d(x_d^{i_d, i_{d-1}}, \dots, x_1^{i_1, i_0}) \\ \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^d(a_d, \dots, a_1) &:= (\mu_{\Sigma\mathcal{A}}^d(a_d, \dots, a_1)^{i_d, i_0}) \end{aligned}$$

ここで

$$\triangleleft := \sum_{p < q} |\phi_p^{i_p, i_{p-1}}| \cdot (|x_q^{i_q, i_{q-1}}| - 1)$$

である.

$\Sigma\mathcal{A}$ を \mathcal{A} の加法的拡大 (additive enlargement of \mathcal{A}) という.

Proof. 加法的拡大 $\Sigma\mathcal{A}$ が恒等射を持たない A_∞ 圏であることをみる. つまり, $\mu_{\Sigma\mathcal{A}}$ が A_∞ 結合式

$$\sum_{m,n} (-1)^{\mathfrak{A}n} \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^{d-m+1}(a_d, \dots, a_{n+m+1}, \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^m(a_{n+m}, \dots, a_{n+1}), a_n, \dots, a_1) = 0$$

を満たすことをみる. これは $\mu_{\Sigma\mathcal{A}}$ の定義と $\mu_{\mathcal{A}}$ が A_∞ 結合式を満たすことより従う. □

恒等射を持たない A_∞ 圏は加法的拡大に埋め込むことができる.

補題 1.5. 恒等射を持たない A_∞ 圏 \mathcal{A} は加法的拡大 $\Sigma\mathcal{A}$ に充満部分圏として埋め込むことができる.

Proof. I は 1 点集合 $\{*\}$, X^* は任意の $X \in \text{Ob}\mathcal{A}$, V^* は標数 0 の体 \mathbb{K} とすればよい.

$$X := (\{*\}, X, \mathbb{K}) = \mathbb{K} \otimes X = X$$

□

2 ねじれ複体

\mathcal{A} を恒等射を持たない A_∞ 圏, $\Sigma\mathcal{A}$ を加法的拡大とする.

定義 2.1 (前ねじれ複体). $X \in \text{Ob}\Sigma\mathcal{A}$ と $\delta_X \in \text{hom}_{\Sigma\mathcal{A}}^1(X, X)$ の組 (X, δ_X) を前ねじれ複体 (pre-twisted complex) という. δ_X を微分 (differential) や連結 (connection) という.

注意 2.2. $X = \bigoplus_{i \in I} V^i \otimes X^i \in \text{Ob}\Sigma\mathcal{A}$ に対して, $\phi^{j,i,k} \in \text{hom}_{\mathbb{K}}(V^i, V^j), x^{j,i,k} \in \text{hom}_{\mathcal{A}}(X^i, X^j)$ とする. このとき $\delta_X^{j,i} = \sum_k \phi^{j,i,k} \otimes x^{j,i,k}$ は $|\phi^{j,i,k}| + |x^{j,i,k}| = 1$ を満たす.

前ねじれ複体に対する部分複体と商複体を形式的に定義する.

定義 2.3 (部分複体).

定義 2.4 (商複体).

定義 2.5 (ねじれ複体). 前ねじれ複体 (X, δ_X) が次の条件を満たすとき, 組 (X, δ_X) はねじれ複体 (twisted complex) ^{*4} であるという.

- $\delta_X = (\delta_X^{j,i})$ はストリクト下三角行列^{*5} である.
- $\Sigma\mathcal{A}$ の A_∞ 構造 $\mu_{\Sigma\mathcal{A}}$ は A_∞ -Maurer-Cartan 等式 (A_∞ -Maurer-Cartan equation)

$$\sum_{d \geq 1} \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^d(\underbrace{\delta_X, \dots, \delta_X}_d) = \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^1(\delta_X) + \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^2(\delta_X, \delta_X) + \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^3(\delta_X, \delta_X, \delta_X) + \dots = 0$$

を満たす.

注意 2.6. $\mu_{\Sigma\mathcal{A}}$ の定義と δ_X がストリクト下三角行列であることより, A_∞ -Maurer-Cartan 等式の左辺は有限個を除いて 0 である.

定義 2.7 (恒等射を持たない A_∞ 圏 $\text{Tw}\mathcal{A}$). 恒等射を持たない A_∞ 圏 $\text{Tw}\mathcal{A}$ を次のように定義する.

- 対象の集まり $\text{ObTw}\mathcal{A} := \text{Ob}\Sigma\mathcal{A}$
- 任意の $X_0, X_1 \in \text{ObTw}\mathcal{A}$ に対して $\text{hom}_{\text{Tw}\mathcal{A}}(X_0, X_1) := \text{hom}_{\Sigma\mathcal{A}}(X_0, X_1)$
- 任意の $d \geq 1$ と $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{j,i}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して, 合成

$$\mu_{\text{Tw}\mathcal{A}}^d : \text{hom}_{\text{Tw}\mathcal{A}}(X_{d-1}, X_d) \otimes \dots \otimes \text{hom}_{\text{Tw}\mathcal{A}}(X_0, X_1) \rightarrow \text{hom}_{\text{Tw}\mathcal{A}}(X_0, X_d)[2-d]$$

^{*4} 定義 2.5 の条件 (1) と (2) の両方を満たすとき, 片側ねじれ複体 (one-sided twisted complex) といい, 条件 (2) のみを満たすとき, ねじれ複体 (twisted complex) という定義が主である. ねじれ複体は十分大きい d において $\mu_{\Sigma\mathcal{A}}^d = 0$ でないとき, A_∞ -Maurer-Cartan 等式は無限和を含むので定義することができない. 本稿では, この意味でのねじれ複体は出てこないで, 片側ねじれ複体を単にねじれ複体という. この記法は [SS08] に従った.

^{*5} $\delta_X = (\delta_X^{j,i})$ において, $j \geq i$ のとき $\delta_X^{j,i} = 0$ ということである.

は次のように定義される.

$$\begin{aligned} \mu_{\text{Tw}\mathcal{A}}^d(a_d, \dots, a_1) \\ := \sum_{i_0, \dots, i_d \geq 0} \mu_{\Sigma\mathcal{A}}^{d+i_0+\dots+i_d}(\underbrace{\delta_{X_d}, \dots, \delta_{X_d}}_{i_d}, a_d, \underbrace{\delta_{X_{d-1}}, \dots, \delta_{X_{d-1}}}_{i_{d-1}}, a_{d-1}, \dots, a_1, \underbrace{\delta_{X_0}, \dots, \delta_{X_0}}_{i_0}) \end{aligned}$$

注意 2.8. δ_X がストリクト下三角行列であることより, $\text{Tw}\mathcal{A}$ の A_∞ 構造 $\mu_{\text{Tw}\mathcal{A}}$ の左辺は有限個を除いて 0 である.

注意 2.9. $\text{Tw}\mathcal{A}$ における A_∞ 結合式は A_∞ -Maurer-Cartan 方程式に一致する.

加法的拡大はねじれ複体のなす圏に埋め込むことができる.

補題 2.10. \mathcal{A} を恒等射を持たない A_∞ 圏とする. 加法的拡大 $\Sigma\mathcal{A}$ はねじれ複体のなす圏 $\text{Tw}\mathcal{A}$ に充満部分圏として埋め込むことができる.

Proof. $\Sigma\mathcal{A}$ は $\delta_X := 0$ であると考えればよい. □

3 加法的拡大と Tw の関手性

加法的拡大を与える対応は恒等射を考えない A_∞ 関手を定める.

定義 3.1 (恒等射を考えない A_∞ 関手 $\Sigma\mathcal{G}$). 恒等射を考えない A_∞ 関手 $\mathcal{G} : \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ に対して, 恒等射を考えない A_∞ 関手 $\Sigma\mathcal{G} : \Sigma\mathcal{A} \rightarrow \Sigma\mathcal{B}$ を次のように定義する.

($e = 0$) 任意の $X = \bigoplus_{i \in I} V^i \otimes X^i \in \text{Ob}\Sigma\mathcal{A}$ に対して

$$\Sigma\mathcal{G}(\bigoplus_{i \in I} V^i \otimes X^i) := \bigoplus_{i \in I} V^i \otimes \mathcal{G}(X^i)$$

($d \geq 1$) 任意の $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{j,i}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して

$$\Sigma\mathcal{G}^d(a_d, \dots, a_0)^{i_d, i_0} := \sum_{i_1, \dots, i_{d-1}} (-1)^{\natural} \phi_d^{i_d, i_{d-1}} \circ \dots \circ \phi_1^{i_1, i_0} \otimes \mathcal{G}^d(x_d^{i_d, i_{d-1}}, \dots, x_1^{i_1, i_0})$$

定義 3.2 (前自然変換 $\Sigma^1 T$). 前自然変換 $T : \mathcal{G}_0 \rightarrow \mathcal{G}_1$ に対して, 前自然変換 $\Sigma^1 T : \Sigma\mathcal{G}_0 \rightarrow \Sigma\mathcal{G}_1$ を次のように定義する.

($d \geq 1$) 任意の $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{j,i}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して

$$\Sigma^1 T^d(a_d, \dots, a_0)^{i_d, i_0} := \sum_{i_1, \dots, i_{d-1}} (-1)^{\natural} \phi_d^{i_d, i_{d-1}} \circ \dots \circ \phi_1^{i_1, i_0} \otimes T^d(x_d^{i_d, i_{d-1}}, \dots, x_1^{i_1, i_0})$$

補題 3.3. 対応 $G \mapsto \Sigma\mathcal{G}$ と $T \mapsto \Sigma^1 T$ は恒等射を考えない A_∞ 関手

$$\Sigma : \text{nu-fun}(\mathcal{A}, \mathcal{B}) \rightarrow \text{nu-fun}(\Sigma\mathcal{A}, \Sigma\mathcal{B})$$

を定める.

同様の議論で、ねじれ複体を与える対応も恒等射を考えない A_∞ 関手を定める。

定義 3.4 (恒等射を考えない A_∞ 関手 $\mathrm{Tw}\mathcal{G}$). 恒等射を考えない A_∞ 関手 $\mathcal{G} : \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ に対して、恒等射を考えない A_∞ 関手 $\mathrm{Tw}\mathcal{G} : \mathrm{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \mathrm{Tw}\mathcal{B}$ を次のように定義する。

($d = 0$) 任意の $(X, \delta_X) \in \mathrm{Ob}\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ に対して

$$\mathrm{Tw}\mathcal{G}(X, \delta_X) := (\Sigma\mathcal{G}X, \sum_e \Sigma\mathcal{G}^e(\delta_X, \dots, \delta_X))$$

($d \geq 1$) 任意の $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{j,i}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して

$$\begin{aligned} & \mathrm{Tw}\mathcal{G}^d(a_d, \dots, a_0) \\ &:= \sum_{i_1, \dots, i_d \geq 0} \Sigma\mathcal{G}^{d+i_0+\dots+i_d}(\underbrace{\delta_{X_d}, \dots, \delta_{X_d}}_{i_d}, a_d, \underbrace{\delta_{X_{d-1}}, \dots, \delta_{X_{d-1}}}_{i_{d-1}}, a_{d-1}, \dots, a_1, \underbrace{\delta_{X_0}, \dots, \delta_{X_0}}_{i_0}) \end{aligned}$$

定義 3.5 (前自然変換 Tw^1T). 前自然変換 $T : \mathcal{G}_0 \rightarrow \mathcal{G}_1$ に対して、前自然変換 $\mathrm{Tw}^1T : \mathrm{Tw}\mathcal{G}_0 \rightarrow \mathrm{Tw}\mathcal{G}_1$ を次のように定義する。

($d \geq 1$) 任意の $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{j,i}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して

$$\begin{aligned} & \mathrm{Tw}^1T^d(a_d, \dots, a_0) \\ &:= \sum_{i_1, \dots, i_d \geq 0} \Sigma^1T^{d+i_0+\dots+i_d}(\underbrace{\delta_{X_d}, \dots, \delta_{X_d}}_{i_d}, a_d, \underbrace{\delta_{X_{d-1}}, \dots, \delta_{X_{d-1}}}_{i_{d-1}}, a_{d-1}, \dots, a_1, \underbrace{\delta_{X_0}, \dots, \delta_{X_0}}_{i_0}) \end{aligned}$$

補題 3.6. 対応 $G \mapsto \mathrm{Tw}\mathcal{G}$ と $T \mapsto \mathrm{Tw}^1T$ は恒等射を考えない A_∞ 関手

$$\mathrm{Tw} : \mathrm{nu-fun}(\mathcal{A}, \mathcal{B}) \rightarrow \mathrm{nu-fun}(\mathrm{Tw}\mathcal{A}, \mathrm{Tw}\mathcal{B})$$

を定める。

Tw は A_∞ 合成関手と可換である。

補題 3.7. 恒等射を考えない A_∞ 関手 $\mathcal{G} : \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ に対して

$$\begin{aligned} \mathcal{L}_{\mathrm{Tw}\mathcal{G}} \circ \mathrm{Tw} &= \mathrm{Tw} \circ \mathcal{L}_{\mathcal{G}} : \mathrm{nu-fun}(\mathcal{C}, \mathcal{A}) \rightarrow \mathrm{nu-fun}(\mathrm{Tw}\mathcal{C}, \mathrm{Tw}\mathcal{B}) \\ \mathcal{R}_{\mathrm{Tw}\mathcal{G}} \circ \mathrm{Tw} &= \mathrm{Tw} \circ \mathcal{R}_{\mathcal{G}} : \mathrm{nu-fun}(\mathcal{B}, \mathcal{C}) \rightarrow \mathrm{nu-fun}(\mathrm{Tw}\mathcal{A}, \mathrm{Tw}\mathcal{C}) \end{aligned}$$

Tw はコホモロジー圏上の忠実充満性を保つ。

補題 3.8. 恒等射を考えない A_∞ 関手 $\mathcal{G} : \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ がコホモロジー圏上で忠実充満であるとする。このとき、恒等射を考えない A_∞ 関手 $\mathrm{Tw}\mathcal{G} : \mathrm{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \mathrm{Tw}\mathcal{B}$ はコホモロジー圏上で忠実充満である。

4 Tw に対する c-unital 性

補題 4.1. \mathcal{A} が恒等射を持つとき、 $\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ は恒等射を持つ。

Proof. 任意の $X \in \text{Ob}\mathcal{A}$ に対して, e_X が \mathcal{A} における単位元であるとする. このとき

$$E_X = (E_X^{j,i})$$

$$E_X^{j,i} := \begin{cases} \text{id}_{V^i} \otimes e_{X^i} & (j = i) \\ 0 & (j \neq i) \end{cases}$$

は $\text{Tw}\mathcal{A}$ における単位元である. ^{*6}

□

補題 4.2. $\mathcal{G} : \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が単位的であるとき, $\text{Tw}\mathcal{G} : \text{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \text{Tw}\mathcal{B}$ は恒等射を持つ.

補題 4.3. \mathcal{C} を恒等射を持たない A_∞ 圏とする. \mathcal{A} が恒等射を持つとき, $\text{Tw} : \text{nu-fun}(\mathcal{C}, \mathcal{A}) \rightarrow \text{nu-fun}(\text{Tw}\mathcal{C}, \text{Tw}\mathcal{A})$ は恒等射を持つ.

以上の命題を c-unital である場合に拡張する.

定理 4.4. \mathcal{A} が c-unital であるとき, $\text{Tw}\mathcal{A}$ は c-unital である.

Proof. $\Phi^1 = \text{id}_{\text{hom}_{\mathcal{A}}(X_0, X_1)}$ である形式的微分同相を Φ , $\tilde{\mathcal{A}} := \Phi_*\mathcal{A}$ を恒等射を持つ A_∞ 圏とする. $\Phi : \mathcal{A} \rightarrow \tilde{\mathcal{A}}$ はコホモロジー圏上で忠実充満なので, 補題 3.8 より $\text{Tw}\Phi : \text{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \text{Tw}\tilde{\mathcal{A}}$ もコホモロジー圏上で忠実充満である. 補題 4.1 より, $\text{Tw}\tilde{\mathcal{A}}$ は恒等射を持つ. $\text{Tw}\Phi$ はコホモロジー圏上で忠実充満なので, $\text{Tw}\mathcal{A}$ は c-unital である. □

定理 4.5. $\mathcal{G} : \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が c-unital であるとき, $\text{Tw}\mathcal{G} : \text{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \text{Tw}\mathcal{B}$ は c-unital である.

Proof.

□

定理 4.6. \mathcal{C} を恒等射を持たない A_∞ 圏とする. \mathcal{A} が c-unital であるとき, $\text{Tw} : \text{nu-fun}(\mathcal{C}, \mathcal{A}) \rightarrow \text{nu-fun}(\text{Tw}\mathcal{C}, \text{Tw}\mathcal{A})$ は c-unital である.

Proof. 定理 4.4 の証明で用いた記法を用いる. $\mathcal{G} : \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{A}$ を単位元のない A_∞ 関手, $\tilde{\mathcal{G}} := \Phi \circ \mathcal{G}$ とする. 補題 3.7 より, 次の図式は可換である.

$$\begin{array}{ccc} \text{hom}_{\text{nu-fun}(\mathcal{C}, \mathcal{A})}(\mathcal{G}, \mathcal{G}) & \xrightarrow{\mathcal{L}_\Phi^1} & \text{hom}_{\text{nu-fun}(\mathcal{C}, \tilde{\mathcal{A}})}(\tilde{\mathcal{G}}, \tilde{\mathcal{G}}) \\ \text{Tw}^1 \downarrow & & \downarrow \text{Tw}^1 \\ \text{hom}_{\text{nu-fun}(\text{Tw}\mathcal{C}, \text{Tw}\mathcal{A})}(\text{Tw}\mathcal{G}, \text{Tw}\mathcal{G}) & \xleftarrow{\mathcal{L}_{\text{Tw}\Phi}^1} & \text{hom}_{\text{nu-fun}(\text{Tw}\mathcal{C}, \text{Tw}\tilde{\mathcal{A}})}(\text{Tw}\tilde{\mathcal{G}}, \text{Tw}\tilde{\mathcal{G}}) \end{array}$$

??より, \mathcal{L}_Φ は c-unital である. よって, 図式の平行な矢印はコホモロジー圏上において c-unital な単位元を c-unital な単位元に移す. 右側の垂直な矢印も同様に, c-unital な単位元を c-unital な単位元に移す. 図式の可換性より, $\text{Tw} : \text{nu-fun}(\mathcal{C}, \mathcal{A}) \rightarrow \text{nu-fun}(\text{Tw}\mathcal{C}, \text{Tw}\mathcal{A})$ は c-unital である. □

A_∞ 擬同値が H^0 において逆関手をもつことと定理 4.5 より, 次の命題が従う. この命題は A_∞ 増強の話で重要である.

^{*6} つまり, $\text{Tw}\mathcal{A}$ における単位元は「単位行列」である.

補題 4.7. \mathcal{A}, \mathcal{B} を c-unital な A_∞ 圏とする. $\mathcal{G} : \mathcal{A} \rightarrow \mathcal{B}$ が A_∞ 擬同値であるとき, $\mathrm{Tw}\mathcal{G} : \mathrm{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \mathrm{Tw}\mathcal{B}$ は A_∞ 擬同値である.

5 ねじれ複体の直和とテンソル積

\mathcal{A} を恒等射を持たない A_∞ 圏, $\Sigma\mathcal{A}$ を加法的拡大, $\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ をねじれ複体のなす A_∞ 圏とする.

定義 5.1 (加法的拡大とねじれ複体の直和). $\Sigma\mathcal{A}$ において Y_0 と Y_1 の形式的な直和として表していた $Y_0 \oplus Y_1$ を Y_0 と Y_1 の直和 (direct sum) という.

定義 5.2 (ねじれ複体の直和). $\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ において (Y_0, δ_{Y_0}) と (Y_1, δ_{Y_1}) の形式的な直和として表していた $(Y_0 \oplus Y_1, \delta_{Y_0} \oplus \delta_{Y_1})$ を (Y_0, δ_{Y_0}) と (Y_1, δ_{Y_1}) の直和 (direct sum) という.

定義 5.3 (加法的拡大のテンソル積). $Y = \bigoplus_{i \in I} W^i \otimes Y^i \in \mathrm{Ob}\Sigma\mathcal{A}$ と次数付き有限次元ベクトル空間 Z に対して

$$Z \otimes Y := \bigoplus_{i \in I} (Z \otimes W^i) \otimes Y^i$$

を Y のテンソル積 (tensor product) という.

テンソル積をとる操作は $\Sigma\mathcal{A}$ 上の恒等射を考えない A_∞ 関手を定める.

定義 5.4 ($\Sigma\mathcal{A}$ 上のテンソル積関手). 恒等射を考えない A_∞ 関手 $Z \otimes - : \Sigma\mathcal{A} \rightarrow \Sigma\mathcal{A}$ を次のように定義する.

($d = 0$) 任意の $Y \in \mathrm{Ob}\Sigma\mathcal{A}$ に対して $(Z \otimes -)(Y) := Z \otimes Y$

($d = 1$) 任意の $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes y_1^{j,i}) \in \mathrm{hom}_{\Sigma\mathcal{A}}(Y_0, Y_1)$ に対して

$$\begin{aligned} (Z \otimes -)^1(a_1) &:= \mathrm{id}_Z \otimes a := \bigoplus_{i,j} (\mathrm{id}_Z \otimes \phi_1^{j,i}) \otimes y_1^{j,i} \\ &\in \bigoplus_{i,j} \mathrm{hom}_{\mathbb{K}}(Z \otimes W_0^i, Z \otimes W_1^j) \otimes \mathrm{hom}_{\mathcal{A}}(Y_0^i, Y_1^j) \end{aligned}$$

($d \geq 2$) 任意の $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{j,i}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して

$$(Z \otimes -)^d(a_d, \dots, a_1) := 0$$

定義 5.5 (ねじれ複体のテンソル積). $(Y = \bigoplus_{i \in I} W^i \otimes Y^i, \delta_Y) \in \mathrm{Ob}\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ と有限次元次数付きベクトル空間 Z に対して

$$\begin{aligned} Z \otimes Y &:= \bigoplus_{i \in I} (Z \otimes W^i) \otimes Y^i \\ \delta_{Z \otimes Y} &:= \mathrm{id}_Z \otimes \delta_Y = \left(\sum_k (\mathrm{id}_Z \otimes \phi^{j,ik}) \otimes y^{j,ik} \right) \end{aligned}$$

*7 をねじれ複体のテンソル積 (tensor product of twisted complex) という。ここで

$$(\text{id}_Z \otimes \phi^{jik})(z \otimes w) = (-1)^{|\phi^{jik}| \cdot |z|} \otimes \phi^{jik}(w)$$

である。

テンソル積をとる操作は $\text{Tw}\mathcal{A}$ 上の恒等射を考えない A_∞ 関手を定める。

定義 5.6 ($\text{Tw}\mathcal{A}$ 上のテンソル積関手). 恒等射を考えない A_∞ 関手 $Z \otimes - : \text{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \text{Tw}\mathcal{A}$ を次のように定める。

($d = 0$) 任意の $(Y, \delta_Y) \in \text{ObTw}\mathcal{A}$ に対して

$$(Z \otimes -)(Y, \delta_Y) := (Z \otimes Y, \delta_{Z \otimes Y})$$

($d = 1$) 任意の $a_1 = (a_1^{ji}) = (\phi_1^{j,i} \otimes y_1^{j,i}) \in \text{hom}_{\text{Tw}\mathcal{A}}((Y_0, \delta_{Y_0}), (Y_1, \delta_{Y_1}))$ に対して

$$\begin{aligned} (Z \otimes -)^1(a) &:= \text{id}_Z \otimes a := \bigoplus_{i,j} (\text{id}_Z \otimes \phi^{ji}) \otimes y^{ji} \\ &\in \bigoplus_{i,j} \text{hom}_{\mathbb{K}}(Z \otimes W_0^i, Z \otimes W_1^j) \otimes \text{hom}_{\mathcal{A}}(Y_0^i, Y_1^j) \end{aligned}$$

($d \geq 2$) 任意の $a_1 = (a_1^{ji}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{ji}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して

$$(Z \otimes -)^d(a_d, \dots, a_1) := 0$$

注意 5.7. A_∞ -Yoneda 埋め込みによって, $\text{Tw}\mathcal{A}$ 上のテンソル積関手 $Z \otimes - : \text{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \text{Tw}\mathcal{A}$ は $\text{mod}(\text{Tw}\mathcal{A})$ 上のテンソル積関手

$$\mathcal{Z} \otimes - : \text{mod}(\text{Tw}\mathcal{A}) \rightarrow \text{mod}(\text{Tw}\mathcal{A})$$

を定める。

6 ねじれ複体のシフト

1 次元ベクトル空間 \mathcal{K} を $-\sigma$ シフトさせた $\mathbb{K}[\sigma] = (\mathbb{K}[\sigma], d_{\mathbb{K}[\sigma]})$ を複体とみなす。

定義 6.1 (ねじれ複体のシフト). 複体 $\mathbb{K}[\sigma]$ と $(Y = \bigoplus_{i \in I} W^i \otimes Y^i, \delta_Y) \in \text{ObTw}\mathcal{A}$ のテンソル積をねじれ複体の σ 重シフト (σ -shift) といい, $S^\sigma Y$ と表す。

$$\begin{aligned} S^\sigma Y &:= \mathbb{K}[\sigma] \otimes Y = \bigoplus_{i \in I} W^i[\sigma] \otimes Y^i \\ \delta_{S^\sigma Y} &:= \text{id}_{\mathbb{K}[\sigma]} \otimes \delta_Y = \left(\sum_k (-1)^{\sigma |\phi^{jik}|} \phi^{jik} \otimes y^{jik} \right) \end{aligned}$$

1 重シフトを単にシフト (shift) といい, SY と表す。

*7 これは $\delta = (\delta^{ji})$ と同じ記法である。

定義 6.2 ($\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ 上のシフト関手). $\mathbb{K}[\sigma]$ のテンソル積関手をシフト関手 (shift functor) といい, $S^\sigma := \mathbb{K}[\sigma] \otimes - : \mathrm{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \mathrm{Tw}\mathcal{A}$ と表す.

($d = 0$) 任意の $(Y, \delta_Y) \in \mathrm{Ob}\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ に対して

$$S^\sigma(Y) := (S^\sigma Y, \delta_{S^\sigma Y})$$

($d = 1$) 任意の $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes y_1^{j,i}) \in \mathrm{hom}_{\mathrm{Tw}\mathcal{A}}((Y_0, \delta_{Y_0}), (Y_1, \delta_{Y_1}))$ に対して

$$(S^\sigma)^1(a) := \left(\sum_k (-1)^{\sigma|\phi^{j,ik}|} \otimes y^{j,ik} \right) \\ \in \mathrm{hom}_{\mathbb{K}}(W_0^i[\sigma], W_1^j[\sigma]) \otimes \mathrm{hom}_{\mathcal{A}}(Y_0^i, Y_1^j)$$

($d \geq 2$) 任意の $a_1 = (a_1^{j,i}) = (\phi_1^{j,i} \otimes x_1^{j,i}), \dots, a_d = (a_d^{j,i}) = (\phi_d^{j,i} \otimes x_d^{j,i})$ に対して

$$(S^\sigma)^d(a_d, \dots, a_1) := 0$$

補題 6.3. $\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ 上のシフト関手 $S^\sigma : \mathrm{Tw}\mathcal{A} \rightarrow \mathrm{Tw}\mathcal{A}$ は A_∞ 同型である.

7 ねじれ複体における微分の取り換え

\mathcal{A} は恒等射を持つ A_∞ 圏であるとする.

定義 7.1.

8 ねじれ複体の写像錐

定義 8.1 (ねじれ複体の写像錐). $\mu_{\mathrm{Tw}\mathcal{A}}^1(c) = 0$ である $c \in \mathrm{hom}_{\mathrm{Tw}\mathcal{A}}^0(Y_0, Y_1)$ に対して

$$(\mathrm{Cone}(c), \delta_{\mathrm{Cone}(c)}) := \left(SY_0 \oplus Y_1, \begin{pmatrix} \delta_{SY_0} & 0 \\ -Sc & \delta_{Y_1} \end{pmatrix} \right)$$

を c の写像錐 $\mathrm{Cone}(c)$ という.

9 $\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ における完全三角

\mathcal{A} は恒等射を持つとする.

定理 9.1. $\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ は三角 A_∞ 圏である.

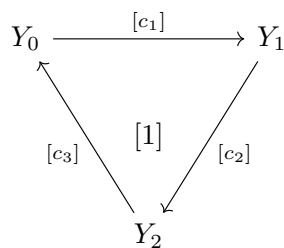
定理 9.2. $H^0(\mathrm{Tw}\mathcal{A})$ は三角圏である.

補題 9.3. $H(\mathrm{Tw}\mathcal{F}) : H(\mathrm{Tw}\mathcal{A}) \rightarrow H(\mathrm{Tw}\mathcal{B})$ は完全三角を完全三角をうつす. よって, $H^0(\mathrm{Tw}\mathcal{F}) : H^0(\mathrm{Tw}\mathcal{A}) \rightarrow H^0(\mathrm{Tw}\mathcal{B})$ は完全関手である.

10 $\mathrm{Tw}\mathcal{A}$ への完全三角の埋め込み

補題 10.1. 次の 2 つは同値である.

1. $H(\mathcal{A})$ において三角図式



は完全である.

2. 埋め込み $H(\mathcal{A}) \rightarrow H(\mathrm{Tw}\mathcal{A})$ の像における三角図式は完全である.

Proof.

□

11 $\mathrm{mod}(\mathcal{A})$ が三角 A_∞ 圏であることについて

参考文献

- [SS08] P. Seidel and European Mathematical Society. Fukaya Categories and Picard-Lefschetz Theory. Zurich lectures in advanced mathematics. European Mathematical Society, 2008.
<https://books.google.co.jp/books?id=N0QxS9Tp50UC>.